某月某日、ときめきの一日

2023 年 9 月 30 日

気分がブルーな時、ふとすれ違う子供たちの無邪気で屈託ない姿に心ほぐされ、思わず頬が緩んでしまうことが多い。電車の中で意表つく行動や生意気な口調で親と対話する子供にハラハラしながらも微笑んでしまっている自分がいる。まさに子供、特に小学低学年までの児童が放つ自由奔放なエネルギー、捉われるもののない発想と無限の感受性にはいつも魅了されてしまう。

＜さて某月某日ー午前ー＞

そんな子供達とふんだんに触れ合いできる、月に一度のイベントの朝を迎えた。
朗読ボランティアとして活動を始めて8年余。その活動のひとつに低学年児童・幼児を対象にした絵本や紙芝居の読み聞かせイベントがあるのだ。

出し物は、イーゼルに掛ける大型絵本・仕掛け絵本・膝に乗せて聞かせる一般絵本そして舞台を使った紙芝居、さらには私がギターかき鳴らして子供達と一緒に歌い踊る手遊びと、およそ八演目、1時間の口演だ。
二週間前からしっかりと企画・準備をし、練習を重ねて本番に臨む。

こちらの狙いが当たって、子供たちの目がキラキラ輝き、演台にかぶりついてくるほど集中し、一緒に笑い・怖がり・大声を出してくれると、演じ手も涙が出るほど嬉しくなって熱を帯びる。当然、その逆に、がっかり肩を落とすこともしばしば。
そんな客席の子供たちのアップダウン激しい反応やヤリトリが大いに刺激的でスリリング。そして、受けなければそれなりの反省点が明確になって次に生かせるのだ。

普段の朗読ボランティアでは主に視覚障害のある人たちへ、マイクからネットや CD を通して書籍・広報誌・新聞などを「声」で配信するのが仕事。
しかし読み聞かせのように朗読現場でリアルにお客様（子供や親）と丁々発止のコンタクトができる機会は我々を鍛えてくれるし、「やりがい」を直接肌に感じる「宝物」である。
それも、何ら利害や考え方・価値観の違いというオトナチックな壁がない純粋無垢な子供達とのふれあいだから、余計に私の一ケ月の中で輝いている。

そして、その時間が私を 「ときめかせてくれる」のだ。

＜その日の一午後一＞

さて、午前中に子供たちの嬉しいハッチャケシャワーを浴びて、急いで帰宅し汗を流して、昼からの「次のときめきタイム」へ向け入念に準備。
薄く眉をひき、オールドスパイスのコロンを振り掛け、8月にワイキキのキヨミズの舞台から飛び降りて買った高級アロハを身にまとう。
そう、I have a date this afternoon！ I'm so excited！

2カ月に一回程度、大阪のお笑いを一緒に観劇したり絵画鑑賞したりで、元の会社の女性エンジニアと「逢瀬」の機会を持たせてもらっている。 今日はその約束の日。

彼女は私の部門にいたこともあり、新人同然のころから随分とセクハラ・パワハラの狼藉をはたらいたが、リタイア後、コンサルに転じた私と、偶然同じ電車で鉢合わせしたのが彼女の運の尽き。
それ以来、なぜかこちらからの美術展巡りの誘いに応えてくれながら、彼女からは趣味のお笑い観劇への案内に同伴させてもらうことで、お付き合いを重ねているのだ。

彼女からみれば「お付き合い」には程遠いだろう。多分、老いさらばえたオニ上司を見かねて「介護」してくれてるのか、もしくはホームから突き落とす隙を狙っているのか・・・そんなことはどうでもいい。
20 歳以上離れた女性と、半日を楽しく過ごし、酒を飲み美味しいものを食す。この時間が大切なのだ。 そしてこの日も悦楽の午後が流れた。

本音をいうと、「ときめく」のは、デート当日というより、逢瀬の約束ができてその日が来るまでの「待つ時間」。子供が遠足を楽しみにしているのと同じだ。

身の回りを振り返ってみれば、実は私が親しくお付き合いしているお相手は、ボランティアであれ・テニスであれ・山登りであれ・スキーであれ・飲み会であれ・・大半は女性である。青春時代「モテ期ゼロ」であった鬱憤をここで晴らしているともいえる。

そして、そんなお付き合いの延長線に昨年完遂した私の第三の終活、「おれが抱いた 100 人の女性」(写真アルバム)がある。

なんやかんやいっても、こうした「ときめき」のルーツは、女性賛美の助兵衛精神であるのに違いない。
私にエネルギーと若さが残っているなら、この「ときめき」も大いなる源泉なのである。

こんな某月某日の
「ときめき」とそれをトリガーとする行動が、
いつでも「人生をカラフルに」してくれると信じてやまない。